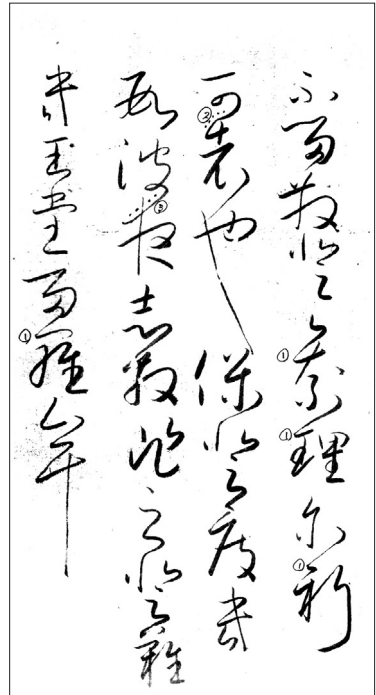


◆半紙たて書きに臨書して下さい。出品料420円



秋萩帖

- 1、字句 不^ふ留^{りゅう}散^{さん}登^{とう}々々、奈^な理^り尔^に新^{しん}可^か者^者也、保^ほ登^{とう}度^ど幾^幾数^{すう}
波^な夜^や志^し散^{さん}非^ひ之^の登^{とう} 難^{なん}幾^幾王^{わう}堂^{どう}留^{りゅう}羅^ら卒^{すつ}
- 2、形式 半紙をたてに使用し、原帖通りに収める。
落款は①四行目、最後の文字と調和させて。
②四行目に添うように五行目として。
の、いづれかで入れる。
- 3、概観 前回の五回目では、ここまでの臨書で身に付けてきた秋萩帖独得の筆
庄の変化や、連綿の仕方などをもとに、一首を半紙に収めてみました。
秋萩帖臨書最終回の今回は、五回目の課題よりやや動きが感じられる
一首です。その雰囲気が出るよう、楽しんで書いて下さい。
- 4、臨書のポイント
(1)字形に ・最終画を意識的に伸ばし、行の流れに変化をつける。
一行目 ㄱ 二行目 ㄱ
三行目 ㄱ 四行目 ㄱ
三行目 ㄱ 四行目 ㄱ
(2)筆づかい ・一文字の中に豊かな筆庄の変化をつける。
ㄱ (二行目) ㄱ (二行目) ㄱ (四行目)
・三通りの連綿をする。(①③参照)
①連綿を受け、一たん止まって一画目へ。ほとんどがこの受け方
であり、右下から次の一画目に向けては、同じような角度であ
る。
②連綿の途中で方向を変える。 ㄱ ㄱ
③連綿線が次の第一画目となる。 ㄱ ㄱ
・各行ともわずかに右下へ流れる。
・行間は、原帖より少し広くとるようにする。
- (3)行に
ついて

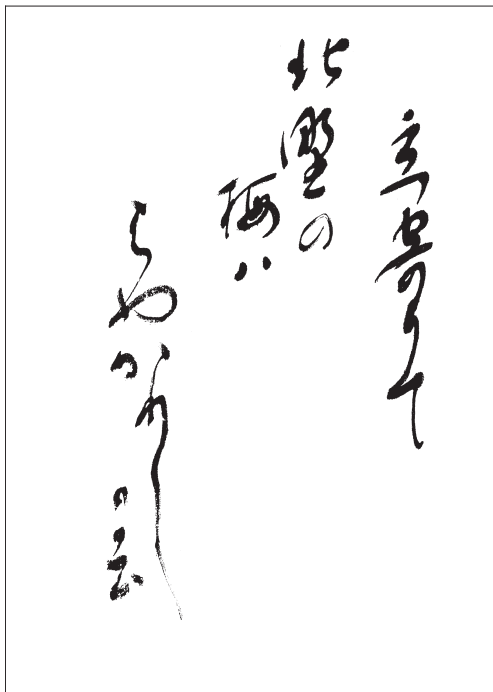
半 紙 予 告 (予告) (二月二十二日締切)



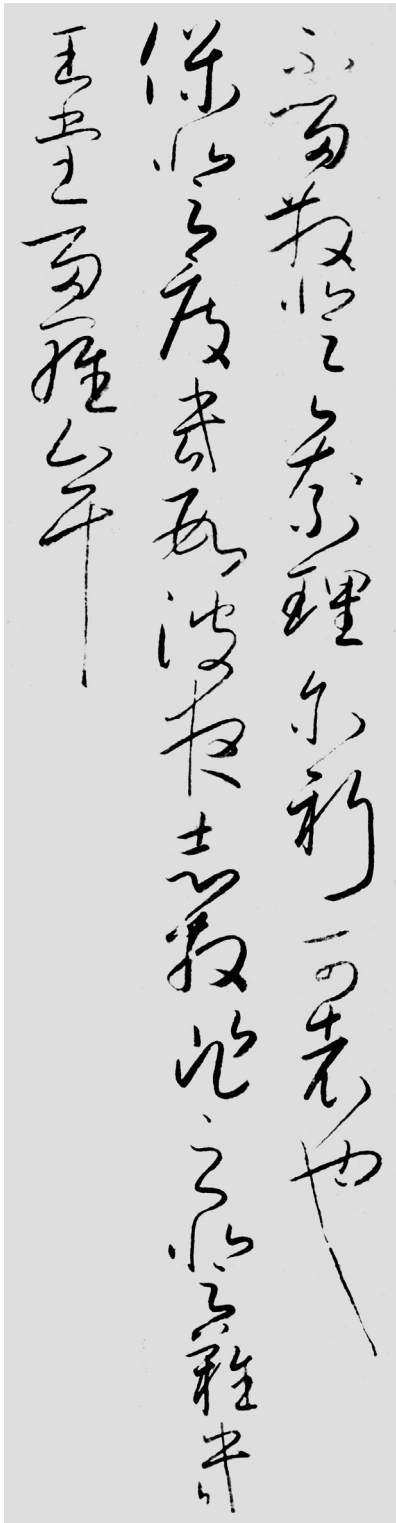
平岡華雪先生書 東郊新春を迎ふ(文徵明)

訳：新春を野辺に迎える。

平岡華雪先生書 立寄りて北野の梅は早かりし(いはほ)



秋萩帖



不_レ留_レ散_レ登_レ 奈_レ理_レ尔_レ新_レ可_レ者_レ也 保_レ登_レ度_レ幾_レ敷_レ波_レ夜_レ志_レ散_レ非_レ之_レ登_レ難_レ幾_レ王_レ堂_レ留_レ羅_レ牟_レ
 ふるさと、なりにしかばやほととぎすはやしさびしとなきわたるらむ

今回の一首を半切に三行書きしましょう。

一行目：不_レ留_レ可_レ者_レ也（新・也の最終画を

伸ばす）

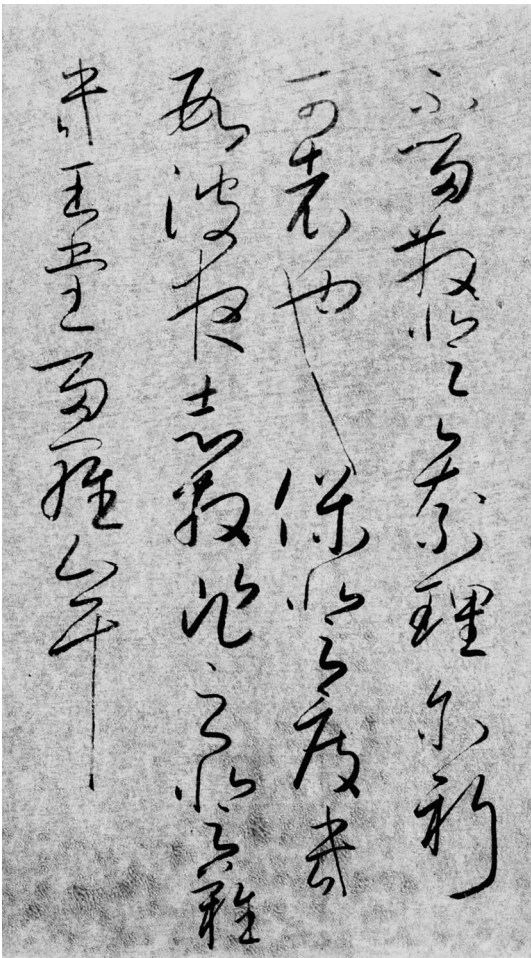
二行目：保_レ登_レ難_レ幾（字間をつめるように

しこ）

三行目：王_レ牟（この流れのまま落款を入

れる。）

▽出品料五二五円。

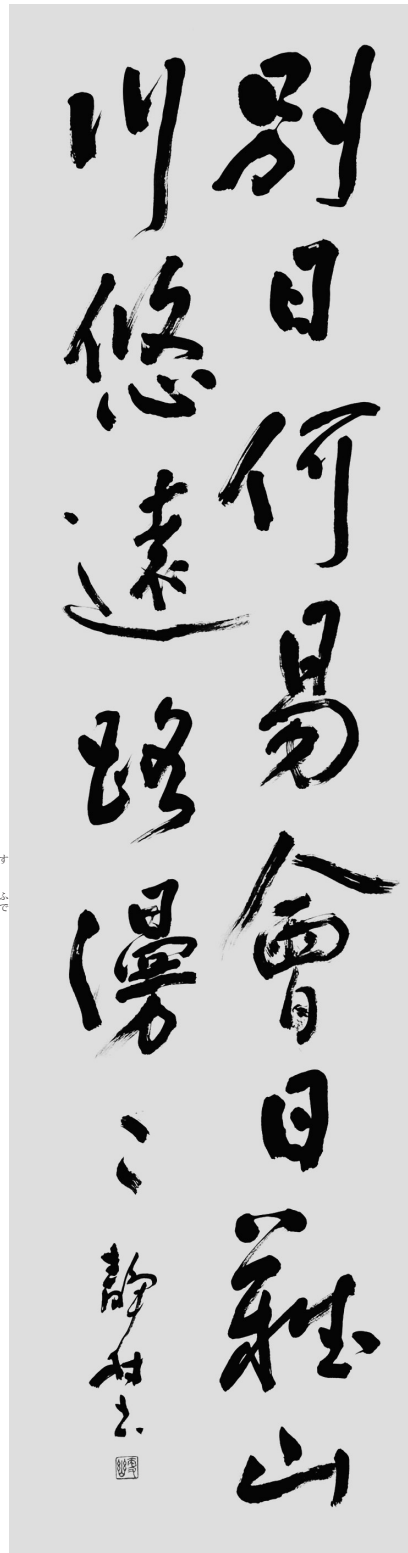


◆注意 ・条幅臨書部の出品はバーコード券右空欄に条臨と記入する。

A

鈴木静村書

別日何易會日難 山川悠遠路漫漫 (文帝)
別日何ぞ易く会日難き、山川悠遠、路漫漫。



B

高橋香樹主幹書

別リ(りっとう)二画は離したい。會 第一画、路・漫の末画の払いが捨て筆気味、捨て筆は要注意。末筆は慎重に。日の形が続く、少々気にか
けてほしい。難 よく使われる筆書体、覚えてほしい。遠 衰の崩しを的確に。漫 古典ではこの形が多い。字典参照のこと。々 楷書でも
「」の形。



今回は行草書です。「何」の縦画を左の方へ伸ばし、「會」まで行書。「會」の「ハ」は三呼吸四呼吸にて書く。「日難悠遠路」の五文字は草書。「悠」の「心」で横巾をとる。「路」はもう少し右に寄せればよかったか。再度見直して誤字を発見。すぐ書き直す。やはり、最後の確認は大切ですね。

訳：別れの日はやさくやって来るのに、再び会うことは難しい。山や川は遠くはるかに、道はどこまでも続いている。

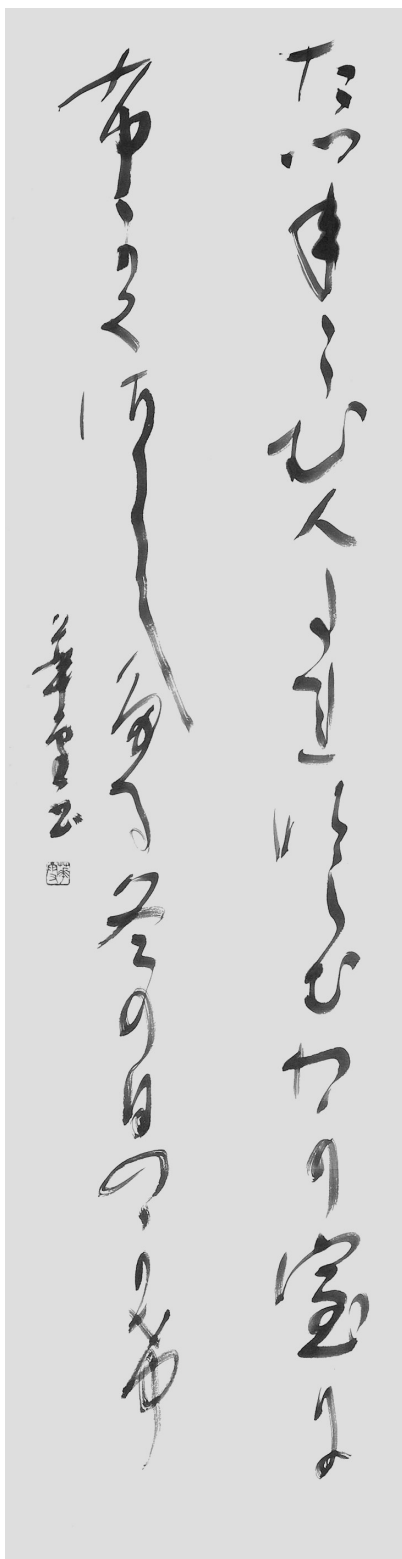
予告 (二月二十二日締切) 去國三巴遠 登樓萬里春 傷心江上客 不是故鄉人 (盧僊)

- ◆注意
- ・条幅部の出品は一人一点 (バーコード券の条漢を○で囲み(1)と記入する。)
 - ・二枚目からの出品 (バーコード券の条漢を○で囲み()に何枚目か数字を記入する。出品料525円)

A

平岡華雪先生書

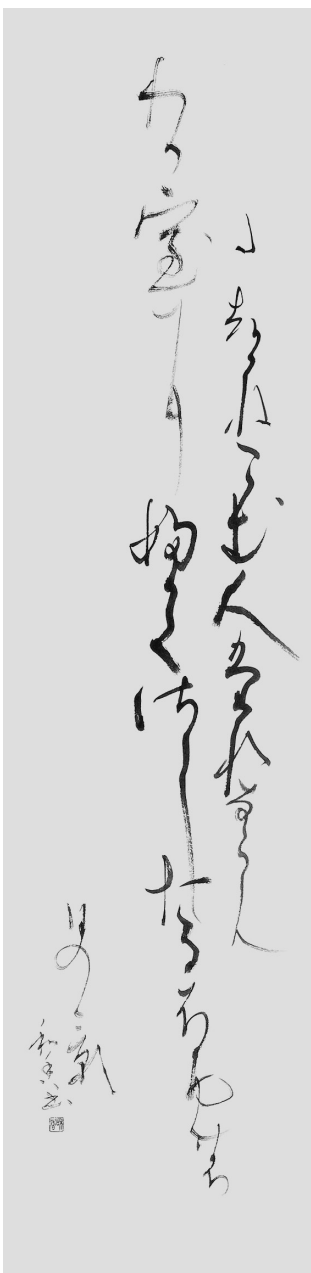
たづね来む人たれならむわが室に深くさしたる冬の日のかげ(古泉千樫)
 た川年こむ人多連那らむわ可室尔布可久佐し多る冬の日のかげ



B

小林和香先生書

多都ねこむ人堂れ奈らんわ可室耳婦可久佐したる不ゆ農日の影



学び方

歌の背景：この歌は「青牛集」に収められており、晩年、病が進行し気も弱くなってきて、話もないのに人が来ないとさびしいらしく来客を待ち望み、帰ろうとすると「もうしばらくもうしばらく」と引きとめていたようである。

二行に「日の影」を小さく添えてみました。一行目は細く小さめに静かに始まり、中央部は墨量豊かに盛り上げ行尾は小さめに、二行目の行頭の濁筆部分は潤筆部を引き立てる役割をします。行頭行尾を小さめにすることで作品に遠近感・厚みを感じていただけたら幸いです。

予告 (二月二十二日締切)

山ふかみなを(ほ) かげさむし春の月空かきくもり雪はふりつ、(新古今和歌集)

古泉千樫

(一八八八〜一九二七)
 千葉県生まれ。明治・大正時代の歌人。伊藤左千夫の門下となり、『アララギ』発刊以後は同門斉藤茂吉とともに実質的な推進力となった。一九二四年同誌を離れ翌々年青垣会を結成。自選歌集『川のほとり』のほか没後刊行の歌集『屋上の土』『青牛集』などがある。

- ◆注意 ・条幅部の出品は一人一点(バーコード券の条かを○で囲み(1)と記入する。)
- ・二枚目からの出品(バーコード券の条かを○で囲み()に何枚目か数字を記入する。出品料525円)

加藤 洞雪 先生書

巖花吐學紅粧麗 谷鳥啼兼鳳管聲 (黃省曾)
 巖花吐學紅粧の麗、谷鳥啼兼鳳管の聲。

巖花吐學紅粧麗
 谷鳥啼兼鳳管聲

訳：岩のあたりに咲く花は赤い春の粧をなし、谷のべに鳴く鳥は鳳管の音のように聞こえる。

福田 玉翔 先生書

君かへす朝の舗石さくさくと雪よ林檎の香のごとくふれ (北原白秋)
 支三閑遍須あ佐の舗石さくさくと登雪よりんこ能可農古東具ふれ

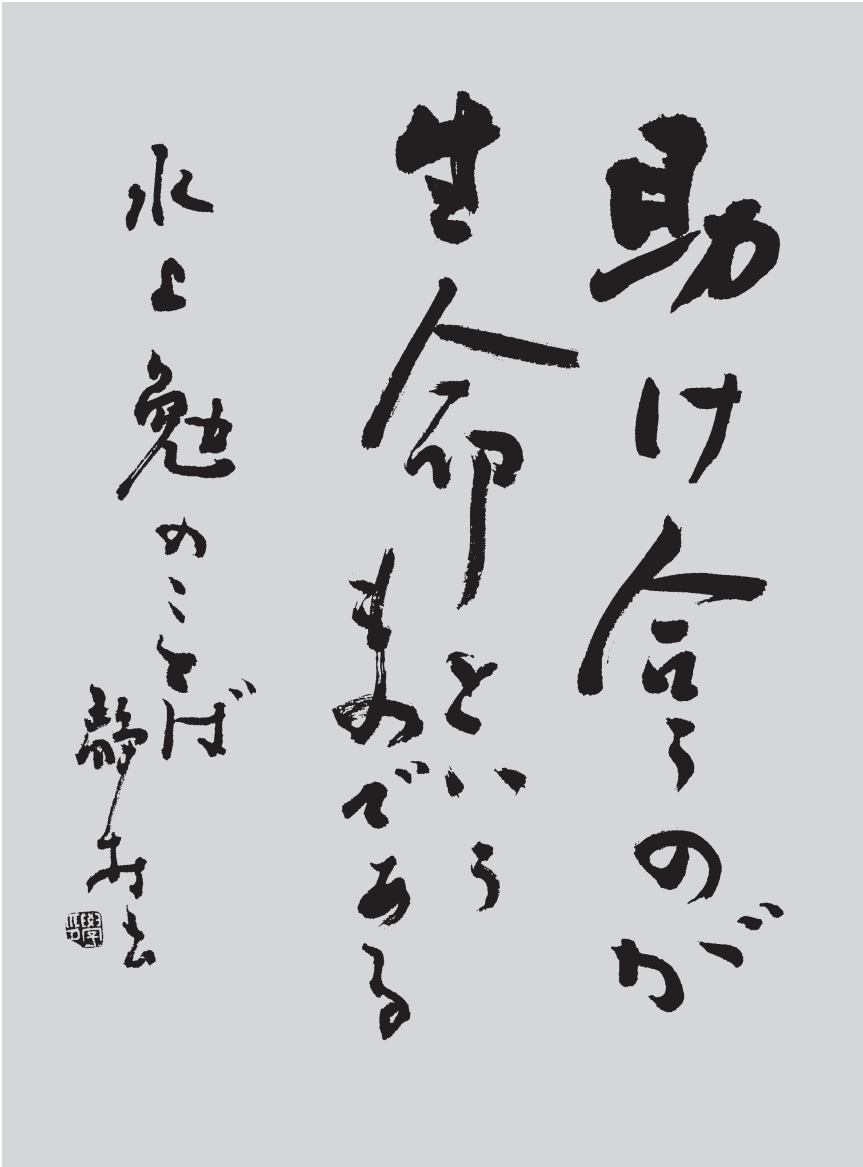
君かへす朝の舗石さくさくと雪よ林檎の香のごとくふれ
 支三閑遍須あ佐の舗石さくさくと登雪よりんこ能可農古東具ふれ

- ◆注意
- ・条幅部の出品は一人一点 (バーコード券の条随を○で囲み(1)と記入する。)
 - ・二枚目からの出品 (バーコード券の条随を○で囲み()に何枚目か数字を記入する。出品料525円)

鈴木静村書

助け合うのが生命いのちというものである。
(水上勉のことば)

筆は兼毫四号。本文は一筆書き。みなさんはそれぞれ特異に試みを――。



- ・漢字四文字が印象に過ぎ、平仮名が追いやられた感。
- ・特に「というものである」の部分で、かなの表出に独自性の導入を望みたい。例えば字幅・太細・潤濁等について――。
- ・落款は参考例作に準じ、印で締めを。

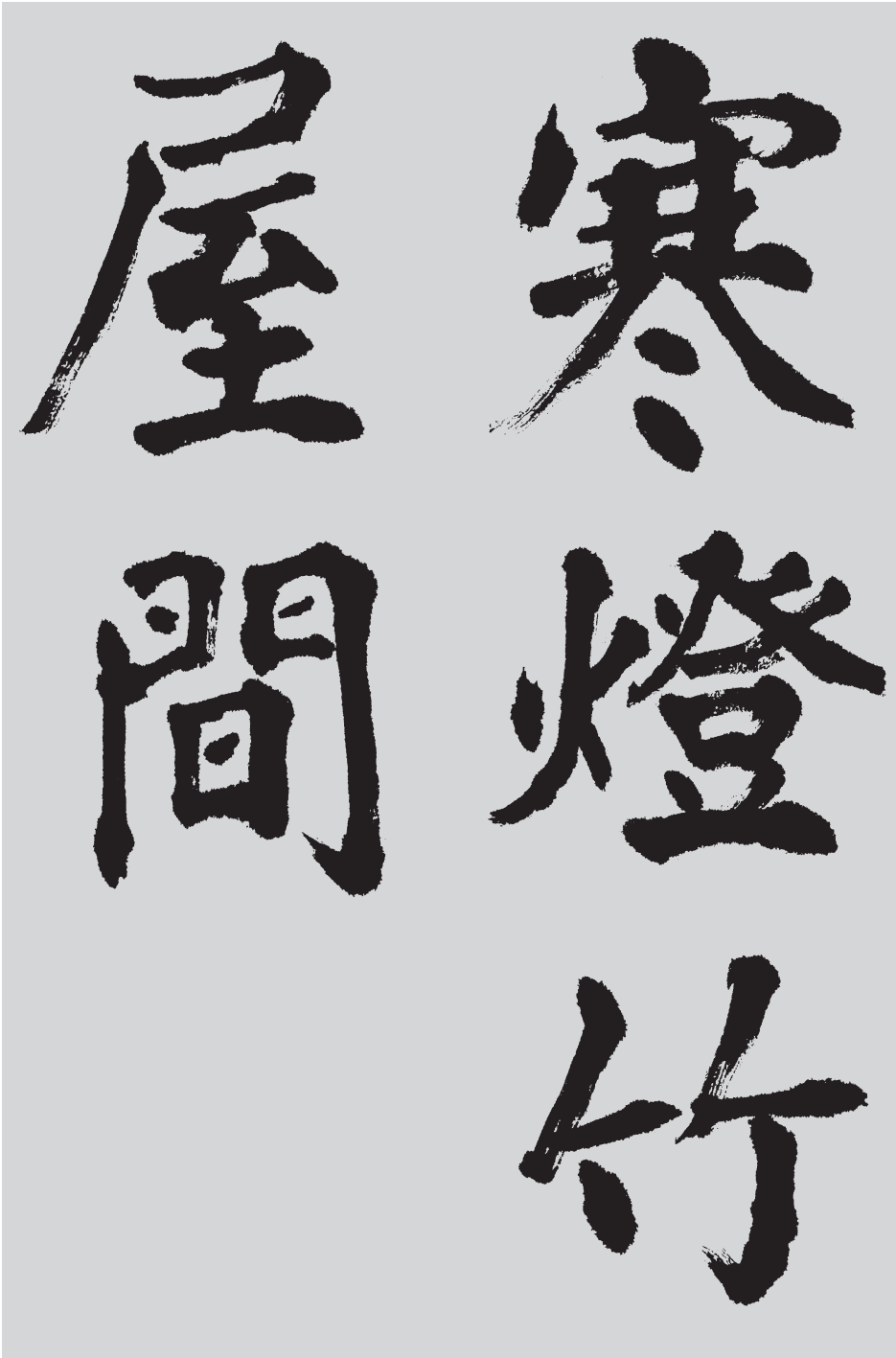
◆注意…はじめて出品される方は私製の紙(3×4cm位)に次の4項目を記入して作品左下隅に貼って出品して下さい。出品料525円。

①バーコード券右空欄に漢かと記入 ②支部名または都道府県名 ③氏名または雅号 ④新

平岡華雪先生書

寒燈竹屋の間。(賈島)

訳：竹林の中の家から冬の夜の燈火がもれている。



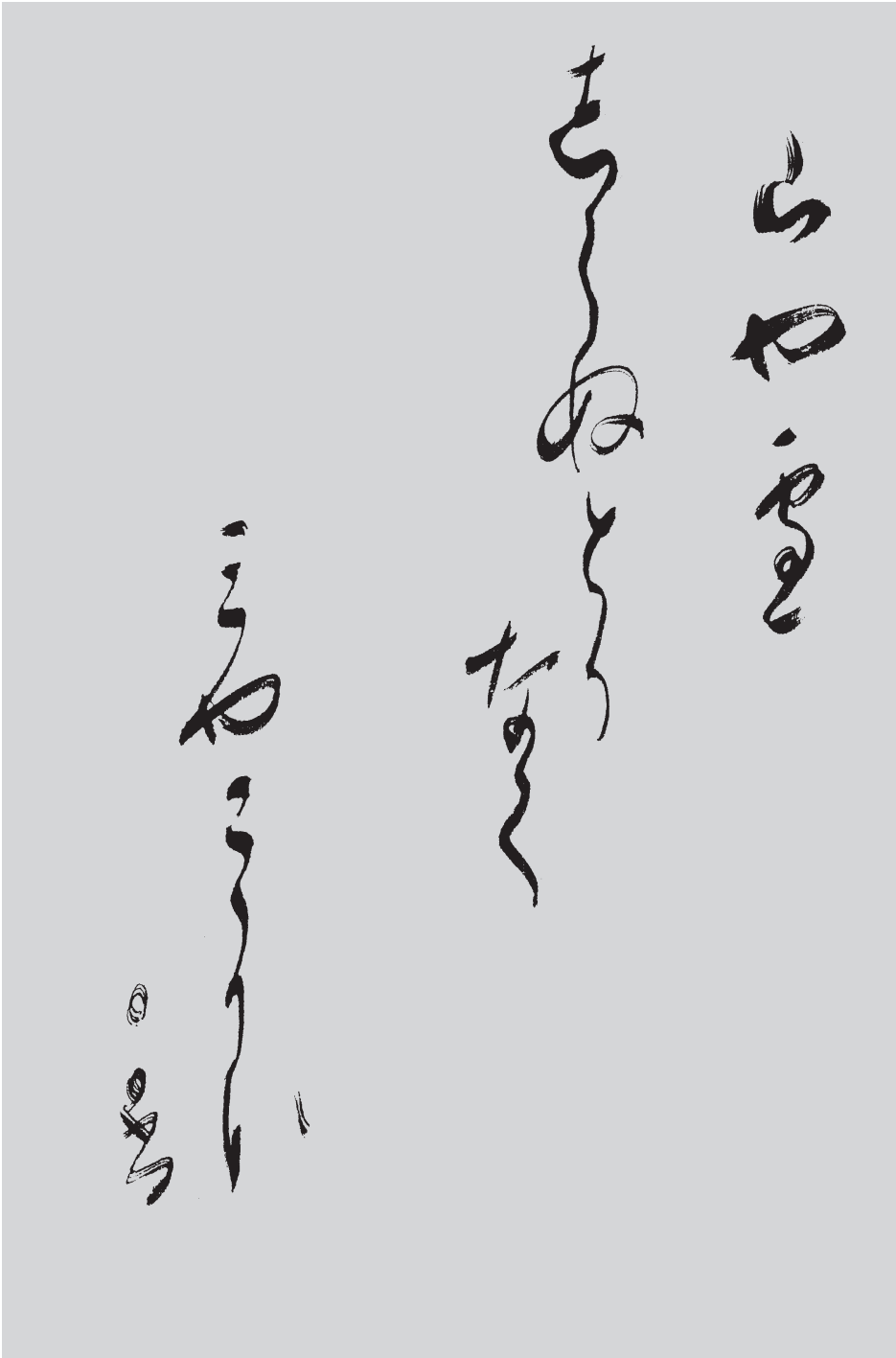
〈弾き返す用筆・左払いについて〉
どんなに短画でも、また細線でも、筆先の利きが根本。鋒先を利かせて、返す用筆であれば線に活きが表出される。弾きのない線は、きれいであっても弱々しく死線に等しい。「左払い」の用筆では特に、末筆に留意。左下へハネ捨てるのは不可。鋒先の力をゆるめないで、次画へ向け、つつける気持ちで「払う」ことです。(「充実」した払いを。)

◆注意…はじめて出品される方は私製の紙(3×4 cm位)に次の4項目を記入して作品左下隅に貼って出品して下さい。会員は無料、会員外出品料は420円。

①漢字部 ②支部名または都道府県名 ③氏名または雅号 ④新会員は無料。

平岡華雪先生書

山や雪知らぬ鳥なくみやこかな (心敬)
 山や雪志らぬとりな久三やこ可那



〈余白について〉

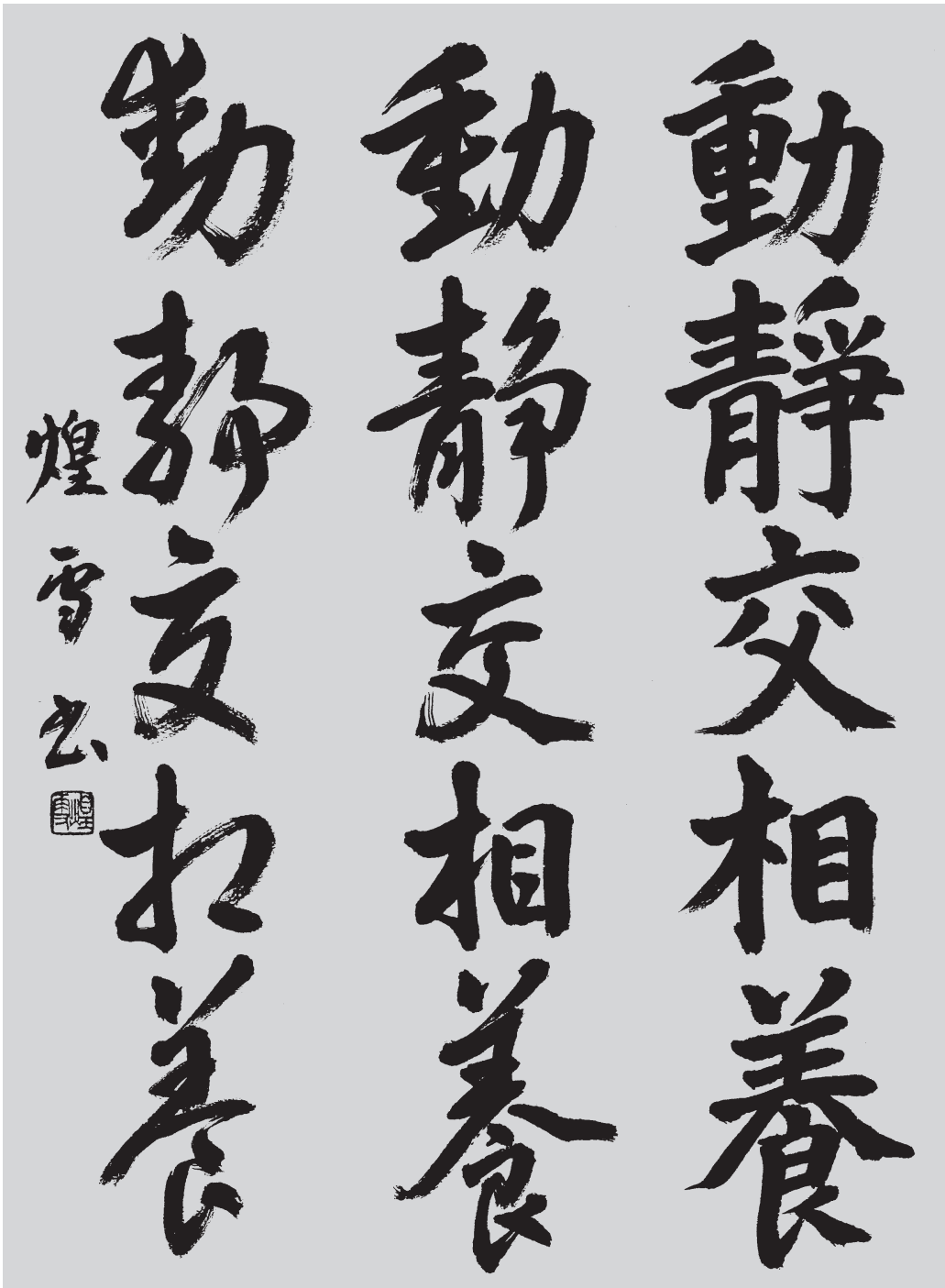
かな半紙の場合、余白のとり方は作品効果に大きな影響があります。この作品は、五行構成となっています。各行間の広さを見て下さい。どこが一番広く、どこが狭いのか。さらに、大事なことは、上、下、左右の空きです。一般に空き過ぎが多い。「余白」に注意しつつ…。

◆注意…はじめて出品される方は私製の紙(3×4 cm位)に次の4項目を記入して作品左下隅に貼って出品して下さい。会員は無料、会員外出品料は420円。

①かな部 ②支部名または都道府県名 ③氏名または雅号 ④新会員は無料。

星野焯雪先生書

動靜交相養（白居易）
どうせいこうもあいやしな
動靜交相養う。



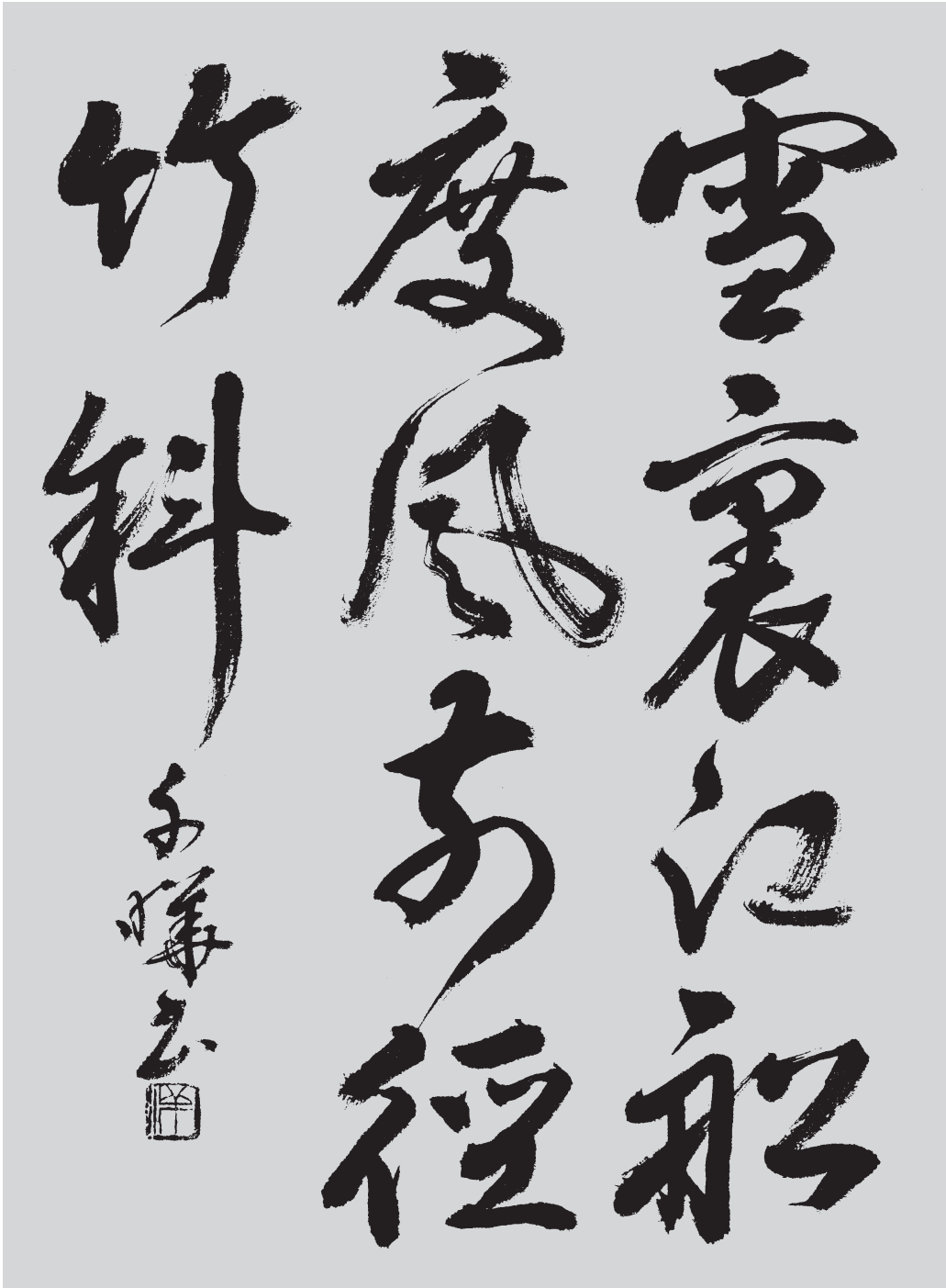
訳：人の世に處するには動靜ともに宜しきを得ねば失敗を招く。

1. 随意部参考として出品してください。
2. 会員外の出品料は420円。

随 意 部 参 考

路川千暉先生書

雪裏江船度 風前徑竹斜（杜子美）
雪裏江船度り、風前徑竹斜なり。



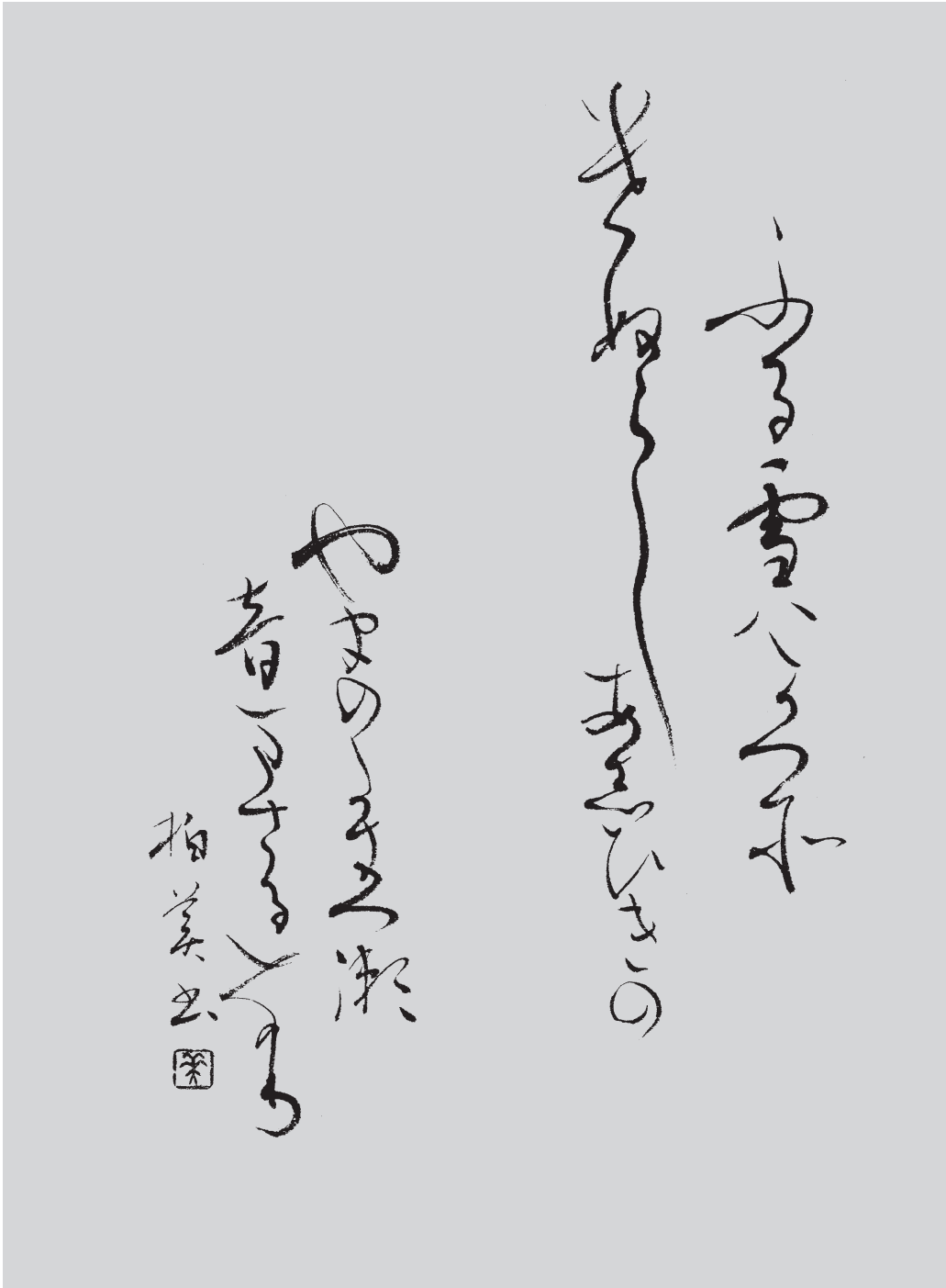
訳：雪の降る中で川の船は水を越え、風の吹く処にこみちの竹は斜になびくのである。

1. 随意部参考として出品してください。
2. 会員外の出品料は420円。

随 意 部 参 考

石 島 柏 美 先 生 書

ふる雪はかつぞ消ぬらしあしひきの山のたぎつ瀬をとまさるなり（古今和歌集 よみ人しらず）
ふる雪八可つ所遣ぬらしあ志ひきのや末の多支つ瀬音万さる奈利



訳：雪の降る中で川の船は水を越え、風の吹く処にこみちの竹は斜になびくのである。

1. 随意部参考として出品してください。
2. 会員外の出品料は420円。

硬筆部課題参考

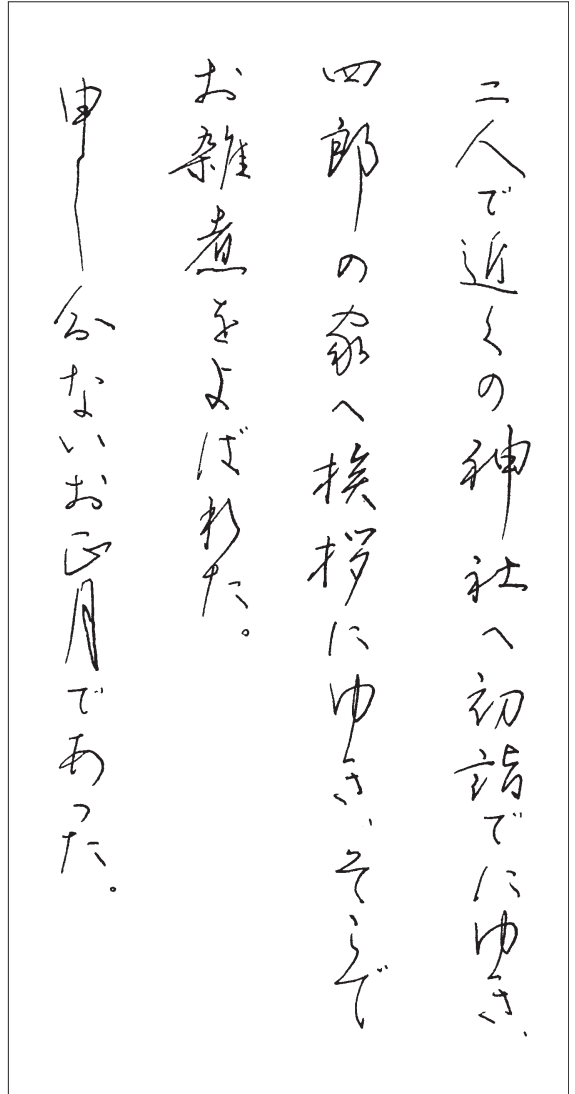
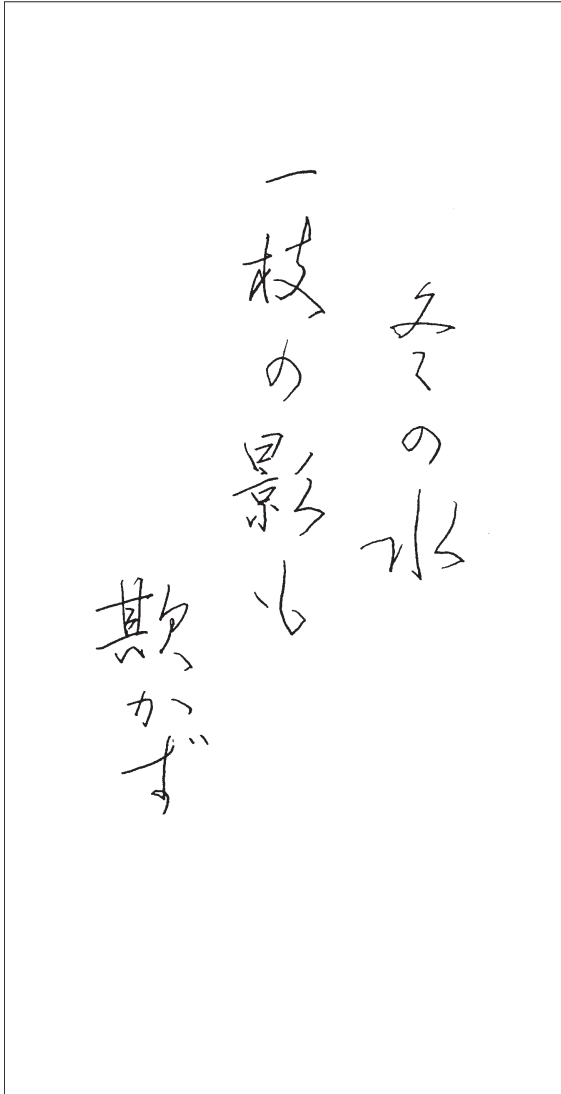
(一月二十二日締切)

松浦江波先生書

石原春香先生書

課題2 (初段階以下)

課題1 (初段階以上)



課題1 (初段階以上)

二人で近くの神社へ初詣でにゆき、
四郎の家へ挨拶にゆき、そこでお雑
煮をよばれた。

申し分ないお正月であった。

「薄荷草の恋」 田辺聖子

◆注意

- (1) 自分の段級に合った課題を選択。
ペンまたはボールペン(黒色)
- (2) を使用のこと。青インクは不可。
段級欄は本人が記入(色は黒)
- (3) はじめて出品される方は私製の
紙(3×4 cm位) 次の4項目
を記入して作品左下隅に貼って
出品して下さい。①硬筆部②支
部名または都道府県名③氏名ま
たは雅号④新
- (4) 会員外は四二〇円加算のこと。

課題2 (初段階以下)

冬の水
一枝の影も
欺かず

中村草田男